

平成 24 年度  
高校生国際協力実体験プログラム  
報告書

2012 年(平成 24 年)

1 回目 8 月 1 日～8 月 3 日

2 回目 8 月 22 日～8 月 24 日

独立行政法人 国際協力機構

九州国際センター(JICA 九州)

〒805-8505 福岡県北九州市八幡東区平野 2-2-1

TEL: 093-671-6311

FAX: 093-663-1350

## 【事業の結果概要】

平成8年度よりJICA九州は、九州の高校生の開発途上国への理解を深めることを目的とした、「高校生国際協力実体験プログラム」を実施しており、今回で17回目を迎えた。

本年度は九州6県(熊本からの応募はなし)の高校から21校の応募があり、選考の結果15校、計71名(生徒56名、教員15名)が本プログラムに参加した。事前学習として、JICA事業の紹介、また参加する生徒の「国際協力」に関するイメージを<sup>※1</sup>ウェビングにより記述し、プログラムの当日に持参するようにした。

国際協力実体験プログラムの第1回目は8月1日から8月3日、第2回目は、8月22日から8月24日にかけての2泊3日、JICA九州で行なわれた。JICA研修員受入事業により各国からJICA九州に来ている研修員との交流、開発途上国の料理試食、帰国隊員による体験談、開発教育ワークショップ、青年海外協力隊活動プロジェクト作成体験等を行なった。

生徒、教員に対するアンケートの結果からは、ほぼ全員がプログラムに対して満足していることが伺えた。特に「青年海外協力隊の体験談」と「活動プロジェクト作成体験」が印象に残っているという回答が多く、体験談での生の声を聞いて将来ボランティア事業に参加したいという声や、プロジェクト作成の過程で、上から押し付けるような活動ではなく住民と寄り添って活動していくことが国際協力の現場では必要なことであることを学んだという声を聞くことができ、2泊3日の短い期間のなかで、国際協力の現場と実際を知り、表面上だけではわからない深い部分の知識を得てもらうことができたのではないかと感じる。

なお、今回プログラムで経験した<sup>※2</sup>クバーラの学校での実施や、国際理解ワークショップなどで学んだ内容を学校祭において発表したいという回答もいただいております、参加校の周りの地域住民や、各県の他の学校への波及効果が期待できる。

## 【アンケート結果】

・三日間を通してプログラムの内容の満足度は何%でしたか(有効回答数 63件)

満足度 (%)	50～59	60～69	70～79	80～89	90～99	100以上
人数	0人	0人	3人	6人	8人	46人

上記の表からもわかるように、95%以上の参加者が80%以上の満足度を示しており、今回のプログラム内容が充実したものであり、参加者の期待に応えられていたことが伺える。

参加者からの要望や改善点の提案として、生徒からは「クバーラの時間をもっと多く取って欲しい」「プロジェクト作成の時間が少ない」などの回答があり、先生からは「もう少し休憩時間を小まめに入れて欲しい」「普段の授業が50分なので集中力が持たないのでは？」などの回答をいただいた。主にタイムスケジュールに関することが多く、2泊3日(実際には丸2日)という限られた時間でプログラムを進行する都合上、対応するのは難しいと思うが、来年度以降に向けての課題と受け止め、よりよいプログラム作りに活かしていきたい。



## <目 次>

### 1. 高校生国際協力実体験プログラム

#### プログラム

開会式・オリエンテーション .....	1
アイスブレイキング .....	2～3
クバーラ .....	4～6
JICA 研修員との交流・夕食会 .....	7～10
げんき体操 .....	11
国際理解ワークショップ .....	12～14
協力隊体験談 .....	15～17
青年海外協力隊活動計画作り .....	18～22
青年海外協力隊活動計画発表 .....	23～24
ふりかえり・閉会式 .....	25
参加校一覧・スタッフ一覧 .....	26

【プログラム名】開会式・オリエンテーション 担当：木下（熊本県国際協力推進員）

### (1) ねらい

- ・プログラムの開会をもって参加への意識を高める。
- ・プログラムの目的および意義を確認することでプログラムへの理解を深める。
- ・プログラムの関係者の存在を認識する。

### (2) 概要

開会宣言の後、JICA 九州国際センター所長村岡(2 回目は次長吉田)より歓迎のあいさつを行った。ミレニアム開発目標に触れ、現在 JICA が行っている国際協力事業についての話と、本プログラムにおいて参加者への期待について述べた。

その後、今回のプログラムをサポートする九州各県の推進員および、九州青年海外協力協会田中職員の自己紹介を 1 人 1 分ずつで行った。自己紹介は、名前・ニックネーム、任国及び職種、私にとっての青年海外協力隊とは、の 4 つの項目で行った。

次に、参加校の紹介として、前方に各校順番に出てもらい、各校リーダーによるあいさつとした。参加校を紹介したのち、3 日間を九州国際センターで過ごすにあたっての注意事項、諸連絡を行った。

最後に、本プログラム参加にあたっての心構えとして、その意義と目的について意識をもたせるための短いブリーフィングを行った。

### (3) 課題とその対応策

自己紹介等で予定以上に時間がかかる傾向があり、30 分という限られた時間内に終わらせることは引き続き課題として挙げられる。

その後のプログラムを通じて、参加者とは交流できることから、各人が意識をもって時間を守ることを徹底することが唯一の解決策である。



(第 1 回目開会式 村岡所長挨拶)



(第 2 回目開会)

式 吉田次長挨拶)

【プログラム名】アイスブレイキング 担当：南（長崎県国際協力推進員）

### （１）ねらい

- ①参加者一人ひとりの緊張をほぐす。
- ②コミュニケーション（話す・聴く）の練習をする。
- ③グループメンバーとの交流を深める。

### （２）概要

全体ワーク、ペアワーク、グループワークとして、5種類のワークを実施した。

全体ワークでは、バースデーチェーン（参加者が誕生日順に円になる）を実施し、円を形成した後にニックネームと誕生日を発表するという形で、簡単な自己紹介とした。全体にどのような参加者がいるのか、顔と名前の一致を図る機会として位置づけた。1回目、2回目ともに滞りなく円が形成された。

ペアワークでは、ペアを形成した後、オセロ紹介（ペアで互いの長所と短所を発表しあう）を実施した。相手が長所を話す際は、大きくうなずく、笑顔で返すなど、積極的な「聴く」姿勢をとり、相手が短所を話す際は、その短所を裏返して長所にして返すという「相手のネガティブな発言を受け止める」姿勢をとるように指示をした。実施に先立って、スタッフで例を示した。男女ペアでは恥ずかしそうなそぶりを見せるペアもあり、また相手の短所を裏返すというのは困難なものであったが、乗り越えることで自信につながるワークであったため、励ましながら進行した。終了後に、言葉だけに頼らず、「相手の目を見て、笑顔で接し、時にジェスチャーも交える」ことで相手は安心し、コミュニケーションが円滑になることを補足し、続くプログラム；JICA 研修員（外国人）との交流でも実践するよう伝えた。

グループワークでは、まずグループを形成した後に、「エブリボディアップ（座った状態で手をつなぎ、同時に立ち上がる）」を合図として、グループごとに机とイスのセッティングをする共同作業をした。制限時間を設け、ゲーム感覚で作業を進め、5分程度でセッティングを完了した。

続くグループワークでは、グループ内で自己紹介をし、グループ名を決め発表した。グループメンバーの共通点、相違点からヒントを得て、できるだけユニークなグループ名をつくるように指示した。グループによって進度に差があったが、1回目、2回目ともに、全グループが制限時間内でグループ名を決定することができた。

最後のグループワークでは、続くプログラムで登場する JICA 研修員の母国の写真を使用し、フォトランゲージ（写真から読み取れることや疑問に感じたことを自由に書き出す）を実施した。初対面の相手の前で、率直な意見を書き出すということに抵抗を示す場合もあったが、「正解は必要ないこと」、「たくさん書き出す方が発見につながることを」伝えて進めた。挙げた疑問点は、JICA 研修員に直接質問できることを伝え、終了した。

### （3）課題とその対応策

- ・ ペアワークではあえて男女ペアの設定をしたが、個人によって照れがある等、抵抗があるようだ。ペアワークは同性同士の設定とし、グループワークからジェンダーバランスを整える方が、よりスムーズな展開が期待できる。
- ・ 10分内で自己紹介を済ませ、且つグループ名を決定することが難しいグループもあった。初対面の参加者同士がグループ内でそれぞれ進行するにあたって、自己紹介の項目をあらかじめこちらで提示する等配慮する必要がある。
- ・ フォトランゲージでは、こちらで準備した写真を使用した。続くプログラム（JICA 研修員との交流）で使用することが前提であるため、JICA 研修員から提供を受けた写真を使用する方が、参加者と JICA 研修員の交流がより深まるきっかけとなる。
- ・ 1回目、2回目ともに引率教諭から「自分も参加したかった」というコメントがあったため、引率教諭から希望があり且つ人数に余裕がある場合、生徒と共に参加してもらうことも検討する方がよい。

### （4）参加者からの声

- ・ 初対面の人ともしっかり話すことができるようになったプログラムでした。この後のプログラムでチーム全員が協力し合えるきっかけになったと思う。
- ・ 最初に、他校の人とどのように関わっていけばいいか少し悩んでいましたが、アイスブレイキングでスムーズに話し合え、積極的・意欲的に取り組める活動だった。
- ・ 私以外、グループ全員が先輩だったが、すぐに仲良くなれたので嬉しかった。



(フォトランゲージの様子1)  
ランゲージの様子2)

(フォトラ

**【プログラム名】**クバーラ 担当：松尾（佐賀県国際協力推進員）

(1) ねらい

- ・ プログラム内での最初のグループ活動となるため、アイスブレイクの一つとして緊張をほぐし、3日間共に過ごす仲間を知る機会とする。
- ・ 研修員と共にスポーツを行うことで、研修員との交流に慣れる。(1回目のみ)

- ・ クバーラに携わった協力隊員を通し、協力隊活動の一部を知る。

## (2) 概要

### ～1回目～

JICA 長期研修員が登場し、グループに参加した。まずは、クバーラと現地の協力隊活動を知ってもらうために JOCA 九州田淵職員（マダガスカル・青少年活動）が隊員時代に出演したクバーラのミニドキュメンタリーを全員で視聴。現地の遊びであったクバーラが、ある隊員の活動によってスポーツ化されたことや、マダガスカルの子どもたちの様子などを知ってもらった。

その後、田淵職員が登場し、その後のクバーラの進行を行った。

ルール説明後、研修員・先生方も交えクバーラのゲームを開始。初めて行うスポーツではあったが、すぐにルールを理解し楽しんでいる様子であった。頭を使うスポーツのため、作戦タイムでは、各グループとも研修員を交えて作戦を一生懸命考えている姿が印象的であった。おかげでチームの団結力も一気に増し、スポーツを通して研修員との交流もできていた。

最後に田淵職員による体験談を聴講した。（研修員は、ここで次の会場へ移動）協力隊活動の難しさやマダガスカルの子どもたちの話に真剣に耳を傾けており、田淵職員の話はそれぞれの参加者の心に響いたようだ。

※【参加研修員】JICA 長期研修員 7 名

### ～2回目～

1 回目と同じ進行形態で、前回同様に田淵職員が進行をした。よりしっかりと準備体操を行うために、田淵職員指導のもと、エアロビクスを行った。ここでも、アイスブレイクを意識した内容を実施した。

今回は、研修員の参加はなく、グループには、推進員やインターン生に加わってもらった。また、グループ数が少なかったことから試合形式としたため、より熱が入った試合となった。

## (2) 課題とその対応策

- ・ 1 回目に転倒者がいた。

⇒対応策：けが防止のために 2 回目以降、準備運動時間を充実させた。

- ・ 1 回目では、全グループに研修員を配置することができず、1 グループのみ高校生のチームがあった。2 回目は、研修員の参加はなかった。

⇒対応策：1 回目は、交流会に長期研修員の参加があり、時間の融通がきいたので、1 つ前のプログラム・クバーラから参加していただいた。クバーラを通して研修員との距離が一気に近くなるが、研修スケジュールの都合上、技術研修員にクバーラに参加してもらうのは難しく、今後、クバーラに研修員の参加をいれるかどうか検討の必要がある。

- ・ けが人の対応について

⇒対応策：けが人に限らず、緊急の連絡事項をどのように各スタッフ、JICA 職員へ情報共有を行うのか、流れを決めておく必要がある。

- ・ 2 回目は、グループ数が少なかったため試合形式とした。しかし、試合形式にすると、1 回戦で負けたチームは、そのあとは観戦するだけになる。

⇒対応策：練習のみ（順次グループをまわし、対戦させる）の場合の欠点等も踏まえ、今後検討を行う。

- ・ 今後、田淵職員が不在の場合、どのように実施していくのか。

⇒対応策：クバーラと協力隊活動のつながり・想いを今後もしっかりと伝えていくための検討を行う。

#### （４）参加者からの声

- ・ ルールは特に難しくなく簡単だと思っていたが、やってみると戦略を立てるのが非常に難しく、なかなか前に進むのが難しかった。
- ・ あまり運動が得意ではない自分でも、同じチームの人や他のチームの人と楽しむことができた。体一つで出来るスポーツという面で経済的であると思ったが、体一つで知らない人と仲良くなれる良いスポーツであると同時に考えさせられ、良い機会になった。
- ・ マダガスカル島での協力隊の活動を知ることができたし、研修員とプレーするのはとても楽しかった。メンバーと一緒にジェスチャーを用いてコミュニケーションをとることができ、作戦も一緒に考え、ともに喜びや楽しさを共有することができた。
- ・ 田淵さんの話の中で、子ども達から多くのことを学んだと言っていたことに驚いた。協力隊に行くのは、教えるだけでなく、派遣先の人たちの純粋な心から学べるということに魅力を感じるとともに、私もその体験を実感したいと強く思った。

#### <1 回目の様子>



(田淵職員の登場シーン)

説明)



(クバーラ体験)

の様子)

(ルール



(作戦会議

<2回目様子>



(エアロビクス)

の様子)



(作戦会議



の様子)  
(組み合わせ抽選)

(作戦会議

**【プログラム名】** JICA 研修員との交流 担当：渡辺（大分県国際協力推進員）

**(1) ねらい**

- ・ 研修員と交流することにより、異文化への理解を深める。
- ・ 言葉の通じない相手とコミュニケーションをとるためには、どのように気持ちを伝えたら理解するかを考え、実践し、通じあった時の喜びや楽しさを体感する。
- ・ 心で聞いて理解し、相手の立場を考えて話すことの大切さに気付く。その姿勢は日本での生活でも大切なことだとわかる。

**(2) 概要**

JICAの長期研修員、技術研修員が高校生の各グループに1~2名加わり、言語の異なる外国人とコミュニケーションを図る交流プログラムを行った。

まず、長期・技術研修員全員が前でネームボードを使って母国語で自己紹介

を行った後、高校生のグループのテーブルに置いてある研修員の母国の写真を探し、着席した(5分)。その後、各テーブルで自己紹介(高校生は英語、JICA研修員は名前と専門を日本語で)を行った(5分)。自己紹介終了後はアイスブレイクで使用した写真を基に、研修員の国について質問の時間を設けた(5分)。

質問時間終了後、各国の食事情(食文化)を研修員にインタビューし、それを基に研修員の母国の代表的な料理を描く「手書き写真」を行なった(30分)。完成した「手書き写真」を、夕食会前にグループ毎に発表し、担当の研修員からコメントをもらった(15分)。

### (3) 課題とその対応策

- ・ 1回目のインタビューの際に、態度の悪い研修員が1名いたため、交流がスムーズに行かないグループがあった。これを受けて、2回目は、研修員の選定と事前のブリーフィングを徹底し、再発を防いだ。
- ・ 1回目は、タイムマネジメントがうまくいかず、その場その場の対応をしたが、2回目は時間を伝え、きちんと流れを把握できるよう説明を行った。発表に関しても、1回目はグループごとに時間がかかってしまったが、2回目は時間を区切り太鼓を鳴らすなどして時間内の発表を促した。

### (4) 参加者からの声

- ・ 研修員との交流会の時にトルコの方がいらっしゃって、はじめは固い英語でなかなかうまく伝わらなかった。少し残念だった。でもジェスチャーなども取り入れたら上手く伝えられたからよかった。
- ・ 中国の方とのお話は理解するのが大変で、難しかったけど、なかなか体験できないことなのでとても勉強になったし、楽しかった。
- ・ 英語をじっさいに話すとなると不安になることが多々あったが、いざプログラムをやってみると、英語はうまくは話せなかったけれど、ジェスチャーや絵に描くといった手段でコミュニケーションを取ることができた。
- ・ もっと英語の勉強をしておけばよかったと思いました。これから頑張りたいと思った。
- ・ 日常生活では知ることのできない他国の食文化を知ることができて良かった。普段学校で英語を学んでいても、実際に外国の方と英語を話す機会はなかなかないので、貴重な体験になった。会話になると、緊張して単語が出てこなくてもどかしいこともあったが、相手の方も一生懸命コミュニケーションを取ろうとして下さったのが嬉しかった。
- ・ I couldn't try to use English today, so I will try to use English tomorrow.

### (5) その他

・参加研修員出身国《1回目》

(技術研修員8名) フィジー2名、モルディブ1名、ミャンマー1名、ニウエ1名、

トンガ2名、ツバル1名

(長期研修員7名) カンボジア2名、ガーナ2名、フィリピン2名、アフガニスタン1名

・参加研修員出身国《2回目》

(技術研修員10名) アルジェリア1名、中華人民共和国2名、フィリピン1名、セルビア2名、タイ1名、トルコ1名、ウクライナ1名、サウジアラビア1名

(長期研修員0名) 参加なし。



(研修員紹介)



(研修員

への質問)



(食文化インタビュー)

表)



(発

**【プログラム名】交流夕食会**  
推進員)

担当：渡辺（大分県国際協力推

**(1) ねらい**

- ・ 研修員と世界各国の料理を味わうことによって、食文化の違いや習慣を理解する。
- ・ 青年海外協力隊経験者である推進員の任国の料理を味わうことで、翌日に行う青年海外協力隊体験談のイメージづくりとする。

**(2) 概要**

JICA 研修員との交流プログラムに続き、研修員を交えた夕食交流会を行なった。メニューは各推進員が青年海外協力隊員として派遣されていた任国の代表的な料理とした。メニューの説明は、各テーブルにお品書きを配布した。1回目はラマダンの時期であったので、日が暮れるまでは食べられない国、文化があることを説明し、イスラム圏の研修員とともに過ごすグループもあり、文化の違いを体験した。2回目はバイキング形式とし、他の班の研修員との交流や、料理の説明を推進員から直接聞けるようにした。

今回は5カ国の料理を準備し、日本にある食材でできる限り現地の味に近づけるように配慮した。ただし、作り方、素材の味が若干違うのでかなり日本人の食に近い味となった。

メニューについては以下の通り

- ① オクロシチュー／オクラと鶏肉のトマト風味のシチュー [アフリカ：西宮推進員（ガーナ）]
- ② ライスボール／餅風味のボール状おにぎり [アフリカ：西宮推進員（ガーナ）]
- ③ ナシゴレン／焼き飯 [東南アジア：崎田推進員（インドネシア）]
- ④ ホーショール／羊肉の揚げ餃子 [東アジア：南推進員、渡辺推進員（モンゴル）]
- ⑤ フリーホーレス／煮豆 [中央アメリカ：大内田推進員（ホンジュラス）]
- ⑥ カルネ アチョリサーダ／ひき肉と野菜の炒め物 [中央アメリカ：大内田推進員（ホンジュラス）]

- ⑦ フラワー／砂糖なしドーナツ[大洋州：木下推進員（パプアニューギニア）]
- ⑧ そのほか、サンドイッチ、フルーツ、お茶、ジュースなど

### （３）課題とその対応策

- ・ 料理については、余るものもあった。1 回目の味、量を参考に、2 回目は味の調整、また人気のあるメニューや野菜の量を増やし調節した。
- ・ 1 回目は、各グループに料理を配膳したが、テーブルの広さに限りがあり食べる時のスペースが確保できないことと、配膳に時間がかかったため、2 回目はバイキング形式とした。会場の後方に地域ごとに料理を配置したところ、他の班の研修員との交流や料理に対する質問などが挙がった。
- ・ 1 回目に、料理が残ったことに対して指摘があった。2 回目は、できるだけ食べてもらうということと、残った料理は推進員、JICA 職員で残さず食べていることを説明した。
- ・ 1 回目の食事時間が 30 分と短かったため、その場で変更し延長した。2 回目は余裕を見て 1 時間の食事時間をあらかじめ確保した。

### （４）参加者からの声

- ・ 食に関することを学んでいるので、世界の様々な料理を知ることができたとし、食べることができて嬉しかった。海外の食べ物は日本人の口に合わないと感じたことがあったので、少し不安でしたが、全部とてもおいしかった。
- ・ 日常生活では知ることのできない他国の食文化を知ることができて良かった。
- ・ いろんな国の食に触れることができて楽しかった。日本と同じような食べ物でも、見た目、食感、味が違い、いろんな発見があった。
- ・ 実際に行った国の料理ということで、一言ずつその料理にまつわるエピソードがあったらよかった。



（研修員との夕食交流）



（国際協力推進員の

任国の料理を味わう）

**【プログラム名】**「げんき体操」 担当：松尾（佐賀県国際協力推進員）

**（１）ねらい**

- ・ 朝の体操で元気よくプログラムに取り組む体制を作る。

**（２）概要**

～ １回目～

まず、「夏休みの朝の体操をしよう」という呼び掛けで、推進員数名が前に立ち、DVD映像を上映しながら「げんき体操」を見せた。デモンストレーション終了後、全員に参加を促し、一度だけ体操を実施。照れながらではあったが、楽しそうに参加していた。

～2回目～

1回目と比べ、男子生徒の参加が多かったので、前で手本を示すスタッフに男性陣を入れた。1回目と同様、体操は1回の実施に留めた。

声かけしながら体操を実施し、積極的な参加を促した。

### (3) 課題とその対応策

・手本を見ている間、参加者は立ったままで手持ち無沙汰であった。  
⇒簡単な体操なので、手本を示さず、最初から生徒たちに参加してもらう。

・広がり足りず、体操できるスペースが確保できていなかった。  
⇒会場の場所が体操をするには元々、狭いので、できる限り広がってもらうよう促す。

### (4) 参加者からの声

- ・初日の疲れが残っている方もいらっしゃるのではテンション下がっていると思います。それに比べて体操のテンションが高いので、こちらまでやる気もテンションも上がった。
- ・かなり恥ずかしかったけど元気になれた気がする。たまには羞恥心をすてることも大切だと思った。



(1回目の様子)



(2回目)

の様子)

## 【プログラム名】国際理解ワークショップ

担当：第1回：松尾（佐賀県国際協力推進員） 第2回：古賀（福岡市国際協力推進員）

### （1）ねらい

- ・ 世界の「貧困」問題を取り上げ、貧困の循環図を作ることで貧困の問題の構造を理解する。
- ・ 貧困の悪循環を断ち切るためにはどの部分からの解決が必要か、よい循環を生み出すための方策を考える。
- ・ グループ内での話し合いにより、様々な分野、切り口からの援助が必要であることを生徒が知ることによって、次プログラムである「協力隊体験談」では国際協力活動への理解を深めること、「開発プロジェクト作成」の際の一助となることを期待する。

### （2）概要

～1回目～ 松尾（佐賀県国際協力推進員）

- ・ 導入  
部屋の4隅を使い、「世界の国の数」、「先進国と途上国の数」、「途上国で暮らす人の数」をクイズ形式で確認した。世界の状況について認識させた。
- ・ ウェビング（派生図づくり） キーワード：「貧困」  
ミレニアム開発目標が取り上げている問題の中から「貧困」という言葉をキーワードとして派生図を書かせた。貧困とは、「どういうこと？」「どんな状態？」「何が困っている？」など自由に書かせ、完成したら他のグループの派生図と比較させ、自分のグループとの違いを確認させた。  
※1回目は、派生図の説明をグループごとに行ったが2回目はカフェ方式で行なった。
- ・ 貧困の輪  
初めに、貧困について考えてもらうために「貧困」のイメージを各グループで話し合い、挙げてもらった。  
次に、「貧困」「栄養が十分とれない」「栄養不良になる」「学校に行けない」「能力や技術が身に付かない」「仕事が見つからない」「収入が足りない」「健康を損なう」の8つの言葉を使い、それぞれの言葉がどのようにつながっているのか、「貧困の輪」を作成させた。

- ・ 貧困の輪の断ち切り

貧困の悪循環を断ち切るためにはどこを断ち切れればいいのか考える。また断ち切るためにどのような方法が必要かを考えてもらう。断ち切る場所は1か所に限定した。その後、「貧困の輪」、「断ち切る場所」、方法をグループごとに発表を行い意見の共有をした。

- ・ まとめ

様々な分野、切り口からの解決方法があることを振り返り、全ての活動は独立したものではなく相互関係があることを伝えた。

貧困を解決するために、ということで「ミレニアム開発目標」と「第5回アフリカ開発会議」の紹介を行った。ミレニアム開発目標から自分の協力隊活動との関係を挙げ、支援の一つとして「青年海外協力隊」の紹介をし、次のプログラム「協力隊体験談」へとつなげた。

## ～2回目～

- ・ 導入

部屋の4隅を使い、「世界の国の数」、「世界の人口」をクイズ形式で確認した。

- ・ 世界の現状について（パワーポイントで説明）

宇宙から撮影した夜の地球の写真を提示、この写真から読み取れる世界の状況を参加者に考えてもらい、開発途上国について、貧困ラインについて説明を行った。また、開発途上国といわれる国々は特にアフリカに多く、来年6月に開催予定の第5回アフリカ開発会議（TICAD5）について、ミレニアム開発目標（MDGs）についての説明も加えた。また、世界には様々な問題があるが「貧困」とはどういうことか参加者に質問したところ「学校に通えない」「病院に行くことができない」「食べ物が買えない」などの意見が出た。

- ・ 貧困の輪

貧困には様々な原因があることを伝え、貧困に関する8つのカード「貧困」「栄養が十分とれない」「栄養不良になる」「学校に行けない」「能力や技術が身に付かない」「仕事がみつからない」「収入が足りない」「健康を損なう」を配布した。

それぞれのカードが原因と結果になっていることを説明、それぞれの言葉がどのようにつながっているのか、各グループで「貧困の輪」を作成した。

## ・ 貧困の輪の断ち切り

各グループで貧困の悪循環を断ち切るためにはどこを断ち切ればいいのか、またその解決策を考え記入した。断ち切る場所は1カ所に限定した。解決策はいくつでも挙げて良いことを伝えた。その後、グループごとにどのような貧困の輪になったか、その理由と断ち切る場所とその解決策について発表を行い意見の共有をした。

## ・ まとめ

「貧困」について改めて振り返り、8月21日にジャーナリストの山本美香さんが亡くなったことに触れ、若者の失業、「貧困」というところから現在のような中東での暴動が起こり、取材に行った日本人が巻き込まれたこと、また「貧困」という厳しい状況にありながらもフィリピンのスラム地区に住む子どもたちには笑顔が溢れていること、一生懸命生きているということ、そのような世界の人々を支援するためにJICAも活動を行っていることを説明した。

また、JICAが行っている事業についても様々な分野からの支援・協力があること、その中の青年海外協力隊についても約120種類の仕事があるということを伝え、次のプログラム「協力隊体験談」へとつなげた。

## (3) 課題とその対応策

### ～1回目～ 松尾（佐賀県国際協力推進員）

- ・ 「貧困」というキーワードを様々な視点から考えることができたが、90分という時間では、いくつか抜粋して深く説明する時間をつくることは難しかった。

⇒**対応策**：参加者の集中力を考えると90分でも長い。これ以上時間を延ばすことはできないので、短い時間で、より考えてもらうには、もっと参加者に問いかけを行うべきと考える。

### ～2回目～ 古賀（福岡市国際協力推進員）

- ・ 貧困の悪循環から抜け出すために一カ所断ち切り、その解決方法を考える時間で“一カ所”と限定したため、悩み、意見がまとまらず時間がかかっているグループも多かった。そのため、当初の予定時間より延長したが、早々に意見がまとまったグループは待ちの状態になった。

⇒**対応策**：じっくり時間をかけて考える時間も必要であると思うが、次のプログラムに繋げるための時間でありこのワークショップのみで解決の糸口が見つかるものではないため、参加者には時間の区切りを明確に提示することが必要である。

## (4) 参加者からの声

- ・ 意外と知らなかった開発途上国の基準や、援助のための先進国がどのような

取り組みを行なっているかについて理解を深めることができた。読み書きできない人が世界中の 10 人に 1 人もいることはとても驚いて、日本に住んでいることが、視野を広げて考えてみると恵まれたことだと気付いた。

- ・ 貧困の輪を作る作業で、どこから始めるかという点で意見が別れましたが、最終的にみんなで納得のできる輪を完成させることができた。他のチームの輪を見て、方法は一通りだけではなく無数にあり、私たちはその中で必要なものを取捨選択し、足りないものは補いながらより良い方法を探していくのだと思った。



(世界の現状について)



(貧困の

輪の発表)

## 【プログラム名】協力隊体験談 担当：西宮（北九州市国際協力推進員）

### （１）ねらい

- ・ 違う職種の複数の協力隊体験談を聞き、各任国の様子、活動について理解する。
- ・ 複数の協力隊体験談から、現地でどのような活動を行い、現地の人たちとどのように関わっていくかを考え、メインプログラムの活動計画づくりに活かす。

### （２）概要

はじめに3分間でJICAボランティアについての概要を説明し、その後、パネルディスカッション形式で3名の協力隊経験者に、それぞれ20分間で体験談を発表して頂いた。

#### ■体験談発表者

- ①大洋州：ミクロネシア 米村淳平さん（小学校教諭）＜教育文化分野＞
- ②中南米：ベネズエラ 一枝あゆみさん（看護師）＜保健衛生分野＞
- ③アフリカ：ウガンダ 小林直子さん（環境教育）＜教育文化分野＞

#### ■発表項目

- ①派遣国（主に任地）の概要（場所、気候、言語、宗教、主要産業）
- ②活動内容（どこで、誰と一緒に、誰を対象に、どのようなことをやったか）
- ③活動で難しかったところ、苦労したところ
- ④活動で嬉しかったこと、成果を感じたところ
- ⑤活動する上で心がけていたこと
- ⑥あなたにとって『国際協力とは…』

90分間の中で3名の話を組み込むということで、事前に各講師からヒアリングをして、発表項目ごとに効率よく「キーワードで話す」ように準備して頂き、また各項目を象徴する写真を厳選してもらって、20分間という短時間でも協力隊の活動内容、ボランティアの意義が伝わるように配慮した。

また、キーワードを模造紙に貼り付け、次のメインプログラムにも役立つように可視化し、パンフレットやワークシートを用意するなど、生徒たちが話に集中出来るよう工夫した。

### （３）課題とその対応策

- ・ 通常の授業が1コマ50分のところを、90分という長丁場だったので、どう

しても 2 人目の体験談が終わった頃に、生徒たちの疲れた表情が見られた。ストレッチやちょっとしたトークで場を緩ませる時間を入れたが、2 日目のお昼前というタイミングということもあって、非常にきつそうだった。

⇒対応策：50 分経った頃に、少し休憩を入れるようにする。

- ・メインプログラムにつなげるために、キーワードを模造紙に貼って可視化して、壁に貼って残していたが、個人でちらほらワークシートを確認している生徒がいたものの、プログラム全体をつなげて活動計画作りに取り組んでいる様子が見られなかった。

⇒対応策：体験談だけでなく、ワークショップも、本当はメインに活用出来るはずなので、どこかのタイミングで、プログラム全体を振り返ってみたり、それまでにやってきたことからヒントが得られることをリマインドする。

- ・2 回とも質疑応答と振り返りの時間が十分に取れなかった。

⇒対応策：90 分で 3 人が限界。次回は、2 人をメインにして、3 人目を司会進行＋自分の体験談を時々織り交ぜる程度にすると、最後にもう少し深められるかもしれない。

#### (4) 参加者からの声

- ・協力隊の方々の体験談が聞けて、青年海外協力隊の実際の様子を知ることができたので、それをプログラム作成に活かした。
- ・一番驚かされたのは、例えば数字や歯磨き、手洗い、環境といったものに対する概念がまずないのだということです。一からその概念を教えていくのは本当に大変なことだろうと思った。また援助をただ「与える」だけではだめで、現地の方が作業をするというのが本当に大事だということを聞いて、なるほどと思わされた。協力隊は本当の意味でその国をもっと良くしていくのだと実感できた。
- ・資料を見たり、読んだりするだけでは分からない、活動するなかでの苦労や現地の人々との絆の強さを知り、協力隊はとて大変だと思うけれど、私も協力隊になって、活動したいと思った。
- ・自分が知識として持っていたことは本当に少しだったんだと反省した。口では言えるけど、数字の意味まで理解できていない、体に良い悪いが判断できずバランスの悪い食生活をする、環境という意味さえ知らないなど、私たちの当たり前が、外国では当たり前ではないという事実、何度となく衝撃を受けた。
- ・体験談を聞けて、より一層国際協力に興味を持つ事ができた。目には見えな

い貧困という言葉聞き、最初は分かりませんでした。体験談を聞くことにより、少しではありますが、知ることが出来たと思う。今の自分にも、日本国内で何かをし、そのことが諸外国の助けに少しでもなれるようなことをしたいと思えた貴重な時間だった。

- ・ 国際協力は現地の人の上に立って、何かをしてあげることではなく、同じ目線に立って一緒に行動を起こしていくことだと気づいた。世界の問題を遠い土地の出来事だと考えるのではなく、もっと身近なものとして捉えられるような広い視野を持ちたいと思った。



(ベネズエラ派遣の一枝さん)



(色々な事を感じた体験談)

<p><b>体験談</b></p>	<p><b>教育文化</b> 米村さん</p>	<p><b>保健医療</b> 一枝さん</p>	<p><b>教育文化</b> 小林さん</p>
<p><b>キーワード集</b></p>	<p>大洋州/ミクロネシア 小学校教諭</p>	<p>中南米/ベネズエラ 看護師</p>	<p>アフリカ/ウガンダ 村落開発普及員</p>

<p><b>①派遣国の概要</b></p> <p>気候 言語 宗教 主要産業 何隊員が多かったか (JICAが力を入れている分野)</p>	<p>熱帯雨林 英語/ポンペイ語 キリスト教 漁業 教育</p>	<p>亜熱帯 スペイン語 キリスト教(カトリック95%、プロテスタント) 石油、鉱物資源 医療(看護師)</p>	<p>熱帯 英語/ルガンダ語 キリスト教・イスラム教・伝統宗教 農業 ネリカ米</p>
<p><b>②活動内容</b></p> <p>どこで 誰と一緒に 誰を対象に 何を目的として どのようなことをやったか</p> <p><b>③活動で難しかったところ、苦労したところ</b></p> <p><b>④活動で嬉しかったこと、成果を感じたところ</b></p>	<p>サラダック小学校 アンジー(新人) 1・2年生 算数力向上 ナンバーセンス</p> <p>魚→●→1</p> <p>教材を残せたこと ほぼポンペイ人になれたこと</p>	<p>村の診療所 診療所スタッフ 村の人々 医療の啓発 予防接種拡大・衛生教育・生活習慣病予防</p> <p>スタッフの協力 情報の伝達</p> <p>農村診療日に多くの 村人が集まった</p>	<p>ムパンガ森林保護区 レンジャー→行政官 ①観光客②同僚③周辺住民 エコツーリズムサイトの マネジメント アリ塚かまど 環境?? 神頼み</p> <p>①Black Naoko Jr. ②もう1人の Naoko</p>
<p><b>⑤活動する上で心がけていたこと</b></p>	<p>一緒に探す マネする</p>	<p>現地スタッフの言葉 で伝える</p>	<p>何でも一緒に</p>
<p><b>⑥あなたにとって『国際協力とは…』</b></p>	<p>もちつもたれつ</p>	<p>生きることを学ぶ 人とのつながり</p>	<p>①選択肢を増やすこと ②体験した責任</p>

【プログラム名】 青年海外協力隊計画作り

担当：崎田（宮崎県国際協力推進員）、大内田（鹿児島県国際協力推進員）

### （１）ねらい

- ・ 参加者自身が青年海外協力隊員として開発途上国に派遣されると想定して、現地の課題に対する２年間の活動計画を作成し、現地の人々にとってよりよい解決方法を考えることを通し、国際協力を行う上で大切な視点を気付かせる。

### （２）概要

まず崎田推進員が、世界と私たちの日常との繋がりについて、衣服や食料について触れ、日々の生活でとても身近にある携帯電話の部品やその製造過程について、開発途上国が関わり、時には児童労働や原料をめぐる争奪戦といった問題を引き起こしているということ話をした。そして国際協力について考えるときに、日本に関係のない国の問題としてとらえるのではなく、同じ地球に住む自分たちに関係のある人々のこととして考えながら、協力隊活動計画作りに臨んでほしいということ伝えた。

また、青年海外協力隊の基本的な活動形態として「活動期間は２年間」「お金は使えない」「現地の言葉を使って活動する」ということ、「誰と共に活動をしていくのか(技術移転)」、「誰のために?(受益者)」そして活動を行うことで、「２年後の村はどうなるのか?」「５年後の村はどうなるのか?」を考えながら活動計画作りをすすめていくことなどの説明を行った。また、協力隊には約 120 もの様々な職種があり、その中からグループごとに職種を選んでいってもらうが、分かりにくい職種の例として、【１回目】コミュニティ開発について南推進員(長崎県)、福永職員（九州海外協力協会）、【２回目】コミュニティ開発について南推進員(長崎県)、青少年活動について古賀推進員(福岡県)に説明してもらい、どのように考え活動計画を実施していったのかなど簡単に話をいただいた。

その後、「活動計画作り」に取り掛かるための作成のポイントなどを説明。作成したプロジェクトは翌日発表をすること、発表の相手は村人だという設定で（１）妥当性（２）計画性（３）効果（４）持続性という観点から評価される点を伝えた。

次に大内田推進員が、活動計画作りの舞台となる『ソラバスタ国サニー村』の紹介を行った。ソラバスタ国サニー村は東ティモールをモデルとした架空の国・村で、各推進員が隊員時代に派遣されていた任地の良い点・課題点などを無理がない範囲で入れ込み作り上げたものである。

地図でソラバスタ国の位置を確認し、グループ内で写真を見てイメージをふくらまし、気づいたことなどを挙げてもらった。その後、村にはどのような人がいるか、どんな仕事をしているかを考えてもらい、村長や先生、農民、商人、

医者、看護師など発表者にはその役になってもらい、参加者とスタッフで村を再現した。また、村の関係者がいる程度揃ったところで、その村で起こる出来事をスタッフと数名の生徒にも協力してもらって寸劇で再現した。

～寸劇の内容は以下の通り～

- ①メッカに向かってお祈り（イスラム教）②水汲みをする女の子（女の子の家庭での仕事量・衛生的ではない水）③市場での出来事（ゴミ捨て・児童労働）④診療所での出来事（医療事情・識字率）⑤病院での出来事（栄養失調）⑥役場の休憩時間（隊員登場、ゴミ問題）

※それぞれの寸劇には村の特徴や問題点を織り交ぜた。

寸劇後も引続き、推進員とスタッフは役のままプログラムは進み、企画調査員役の木下推進員よりサニー村についての説明を受けた。さらに配布されたソラバスタ国及びサニー村の概要を各自で読み込みをさせ、その後グループごとに村の良い点・問題点を書き出し、全員で共有した。

計画作りの途中で、事前にソラバスタ国にインタビューに行ったという設定で作成したビデオを上映。内容は隊員がいる村の村人にその様子を聞き「言葉も上手になって楽しく活動しているわ」という肯定的なもの、「別に自分たちの収入になるわけじゃないからあまり関係ない」といった無関心な意見、「今後環境の面で指導してくれる専門家がほしい」という提案などを盛り込んだ。また、ソラバスタ国から帰国した隊員OBへのインタビューで「村人の理解がなかなか得られなくて苦労した」という意見も盛り込み、村人、隊員それぞれの言葉から、自分達の計画を見つめ直す機会とした。

推進員とスタッフは常に情報共有を行いながら、計画作りが進んでいないグループ、隊員の活動をうまくイメージできていないグループ、また、あまりに現実離れした活動になりそうなグループの把握に努め、そういったグループに対して大内田推進員は、「誰と活動するのか」「本当に村人に受け入れられる草の根レベルの活動なのか」「村人の意見は聞いたのか」といった助言をしながら村人へ相談するよう促し、村人役や企画調査員役の推進員及びスタッフは、それぞれの立場から助言などを行った。

### （3）課題とその対応策

～1回目～

- ・ 休憩や水分補給をしていない生徒が気になった。

⇒対応策：アナウンスなどでその都度休憩や、水分補給を促すようにした。

- ・ 後方にある村人への質問ブースへの質問が少ないと感じた。

⇒対応策：大内田推進員が、看護師や先生も村人の一員なのだとして生徒たちを村

へ誘導し、質問できる環境を整えていった。さらに2回目実施時は、子供役である西宮推進員が質問に行くよう村へ誘導した。

- ・ ビデオ再生の時に字幕が見え難くかった。

⇒対応策：ビデオを見る際は前で見るように促した。来年度への課題。

～2回目～

- ・ 写真からサニー村を分析する時、さらっと見て写真を封筒に戻してしまう生徒が多かった。じっくり写真を確認して欲しい。

⇒対応策：来年度は、机に座ったアイランド形式時に写真を確認してもらい、よく見てもらえる体制をつくり、その後職種が挙げられた時点でサニー村の劇場へ連れて行くようにしたい。

- ・ 休憩や水分補給について

⇒対応策：大内田推進員より水分補給や休憩のアナウンスがその都度あったので、生徒達も意識しながら水分を取っていた。来年度は飴やチョコレートを各テーブルに準備してあげても良いのではとの提案があった。

#### (4) 参加者からの声

- ・ 劇によりソラバスタ国サニー村の現状が良く分かった。
- ・ 問題点の中から1つ選び問題点を解決していくとなると、新たな問題が発生したり、その問題が解決できずに行き詰ることが多々あった。
- ・ 活動計画作りで大変苦労したので、実際に青年海外協力隊として行く人達はさらに苦労をしているのだろうと思った。
- ・ サニー村の村人たちの暮らしの劇をして村人が困っていることを私たちに何ができるのかを話合ったことが大変印象に残った。
- ・ 次から次に問題が出てくるので大変難しかった。
- ・ 問題点や解決策を考えるのが難しかった。
- ・ 実際にサニー村の暮らしを劇で見ることによって文章で読むよりもその問題点が分かりやすく良かった。
- ・ ・自分たちがやりたいことでも村の人々はそうでなかったり、お金の問題があったり、考え方が難しかったけど、自分とは違う考えを持った人たちの意見を聞くのは大変面白かった。
- ・ 劇中の役人に協力を募ったり、村人や看護師さんから意見を聞いて活動内容をまとめていく作業は楽しかった。
- ・ チームのみんなの問題点の改善策を考えながら、より良い解決方法を選び良いプロジェクトを作ろうとすることは面白かった。
- ・ 活動計画作りは村人の意見を聞きながら考えているとなかなか決まらなくて難しかったです。
- ・ 寸劇に参加し、皆で踊った時は、本当にサニー村にいるように思えた。劇のお

かげで活動計画を考える際に本当に親身になって考えることが出来た。

- ・ 取り組みやすいように工夫されていてよかった。
- ・ 活動に入る前に生徒がスムーズに活動できるような仕掛けを多く取り入れていたことが非常に良かった。
- ・ 計画を実行する前に、現地の方々からの理解を得る大変さを痛感した。
- ・ 時間をかけた多角的な企画で興味深かった。

### <第1回目 活動計画作成の様子>



<第2回目 活動計画作成の様子>





## 【プログラム名】 青年海外協力隊活動計画 発表

担当：崎田（宮崎県国際協力推進員）、大内田（鹿児島県国際協力推進員）

### （１）ねらい

- ・ 前日行った『青年海外協力隊活動計画作り』で作成した活動計画を発表し皆で共有する。

### （２）概要

発表前に①グループ 4 分以内②全員が話す③模造紙に書いてあることだけを読むのではなく、なぜその活動に決定したかなどの経費も含めて発表する、④村人へ向けて発表する、というルールの確認を行なった。発表を聞く参加者やスタッフは、評価のポイントが書かれた評価シートにコメントを記入し、それらをもとに質疑応答を行なった。

発表者は、全て絵で表現したプレゼンテーションなど工夫を取り入れながら、活動計画を発表した。

グループごとに水質改善、保健衛生、環境衛生、観光促進、伝統工芸、組合設立など着眼点も様々であった。

質疑応答では、経費がかかる活動に対しての質問などが挙げられ、模造紙に書かれていない背景を説明することで、より具体的なイメージが掴めていたようだ。

発表後、評価シートに基づいて参加者及びスタッフ、JICA 関係者が投票を行い、参加者からの投票数が一番多かった活動には優秀賞、スタッフ及び JICA 関係者からの投票が一番多かった活動には JICA 賞が贈られた。

その後 JICA 九州職員の桑江へより講評をし、それぞれ発表された活動について、実際に JICA が似たような活動をしている事例の紹介や、もし現実にそれらの活動に取り組んだ場合に想定される課題などを解説した。

最後に大内田推進員が、このソラバスタ国サニー村は実際にはない架空の村であるということを参加者に話した上で、似たような国は世界中にあり同じような課題を抱えていること、更には様々な問題が紛争へ発展し、今もなお尊い命が人の手によって奪われている国もあるという現実を伝え、今回のプロジェクト作成を通して考えたこと、悩んだこと、感じたことが高校生のみなさんの日常、更にはこれからの人生の中で活かされ、国際協力についても自分なりの考えを持てるようになってもらえればという思いを伝え締めくくった。

### （３）課題とその対応策

- ・ 2 回目は参加人数が通常より少なかったにも関わらず時間がぎりぎりだった。  
⇒対応策：質疑応答に時間が取られたが、質疑応答に全ての問題や活動計画作りの全てが凝縮されているので、質疑応答の時間を長めに設定してもよいのかもしれない。
- ・ 発表/投票時は、できるだけ多くの JICA 関係者に参加して欲しい。  
⇒対応策：事前に多くの職員やスタッフに声をかけ参加していただく。

#### (4) 参加者からの声

- ・ 問題を解決は非常に難しかったが、達成したときとても嬉しかった。
- ・ グループの仲間と様々な企画を考え、欠点を発見しそれを繰り返すことで徐々に企画が良い方に進んでいくのが楽しかった。
- ・ 皆で何度も計画を練り、プレゼンし質問に答えることで更に計画が細かく決まった。
- ・ チームの皆で悩みに悩み、やっとできた計画を皆の前で堂々と発表することができ満足している。
- ・ 自分達が“してあげる”ことを考えていて、見事に駄目だしをもらううちに、いつのまにか自分が傲慢な考え方をしていたことに気が付いた。
- ・ 今まで授業で、どんな支援をすればいいのかなど表面しか見つめていなかったが、今回、真剣に考えて何が本当に大切なのか、本当に喜ばれる事は何か、深くまで見つめることができた。
- ・ 村を良くするために皆でたくさん考えいろいろと構成を考え大変良い経験になった。
- ・ 全てのチームの発表を聞くことができ、参考になった。
- ・ 3 日前に知り合ったばかりの人と話し合ったり、村人に対して質問をしにいき作ったプロジェクトを発表する事でいろんな人の考え方や問題点を知ることができた。
- ・ 皆で協力して作り上げ発表した経験は大変新鮮なものだった。
- ・ 皆で、2 年後、5 年後、10 年後の先の事を考え、今何をすべきかを話し合い努力しながら進めることができた。
- ・ サニー村のためになることを考え、意見を出し合い活動計画が出来上がりました。色々質問されたらどうしようと考えながら不安がいっぱいでしたが、途中笑いが起きたりで心がなごんだ。

#### <第 1 回目 発表・授賞式>



## <第2回目 発表・授賞式>



**【プログラム名】** ふりかえり・閉会式 **担当：**木下（熊本県国際協力推進員）

### (1) ねらい

- ・ 3日間で参加したプログラムを思い起こすことにより、何をやったのか、何を知ったのか、何を感じたのか、何を学んだのかを認識する。
- ・ プログラムの参加前と後とでの自分の変化を認識する。
- ・ 協力隊の活動を通じての国際協力のみではなく、世界が抱えている問題とその現実を知り、その深刻さや協力の必要性を改めて認識させるとともに、今自分に何ができるかについて考える。

## (2) 概要

### ・ふりかえり

学校ごとに座らせ、目を閉じて3日間を思い起こすことから始めた。その後、事前学習で実施した「国際協力」をキーワードとして作成した派生図を見直し、その上で、事前学習の時に使用したのとは異なる色のマジックで、3日間を通して知ったこと、気づいたことなどを書き足しの作業をさせた。この作業によりプログラムの参加前と後とでどのような変化があったのかを自ら気づかせる意図をもたせた。次に、1人1枚ずつポストカードを配布し、3日間のプログラムを終えた今の思いや、プログラムの感想などをそれぞれ書かせた。このポストカードについては1カ月ほど間を置いて、生徒に返すこととした。

最後に、世界の現状についてプレゼンテーションを行った。ミレニアム開発目標に採択されている項目について、世界にどのような現状があるのかを写真を見せながら再度認識させるとともに、いかに現在世界が抱えている問題が深刻であるかを知る機会とした。また、昨年、東日本大震災の写真から、どんな困難な状況にあっても、人間はその場所で生活し、また、そこから抜け出すためにさまざまな努力を行っていくことができるということを知らしめ、それは日本だけの問題ではなく、地球上に生きる人々全ての共通の課題であるということ締め言葉とした。

### ・閉会式

プログラムの終了にあたり、JICA九州国際センター所長村岡（2回目次長吉田）が閉会の挨拶をした。ミレニアム開発目標に触れつつ、国際協力についての理解を深め、意識を持ってほしいとの言葉で締めくくられた。その後アンケート回収、諸連絡を済ませ、参加者全員による記念撮影を行い閉会とした。

## (3) 課題とその対応策

参加者にふりかえりやすい状況を作ることが重要と考えその方法や内容を昨年度とは若干変更して行った。また、最後にプレゼンテーションを行うことでさらに印象付けを試みた。スタッフからは良かったとの声があったが、参加者にとってどうであったかを検証する必要があると考える。



(第1回目集合写真)  
集合写真)

(第2回目

高校生国際協力実体験プログラム 参加校一覧

<第1回目:8月1日(水)~8月3日(金) 計42名>

	県	学校名	生徒	教員
1	福岡	福岡県立城南高等学校	3名	1名
2	佐賀	佐賀県立武雄高等学校	3名	1名
3	佐賀	佐賀県立唐津東高等学校	4名	1名
4	長崎	長崎県立上五島高等学校	3名	1名
5	大分	国立大分工業高等専門学校	4名	1名
6	大分	大分県立森高等学校	4名	1名
7	大分	私立岩田高等学校	4名	1名
8	鹿児島	私立鹿児島純心女子高等学校	4名	1名
9	鹿児島	鹿児島県立与論高等学校	4名	1名
小計			33名	9名

<第2回目:8月22日(水)~8月24日(金) 計29名>

	県	学校名	生徒	教員
1	福岡	私立沖学園高等学校	4名	1名
2	福岡	国立北九州工業高等専門学校	4名	1名
3	大分	大分県立上野丘高等学校	3名	1名
4	長崎	長崎県立佐世保商業高等学校	4名	1名
5	鹿児島	鹿児島県立加治木工業高等学校	4名	1名
6	鹿児島	鹿児島県立屋久島高等学校	4名	1名
小計			23名	6名

プログラム実施スタッフ一覧

	所属	名前	任国	職種
1	福岡市国際協力推進員	古賀 知美	中央アジア・キルギス	青少年活動
2	北九州市国際協力推進員	西宮 奈緒美	西アフリカ・ガーナ	村落開発普及員

3	大分県国際協力推進員	渡辺 了孔	東アジア・モンゴル	視聴覚教育
4	佐賀県国際協力推進員	松尾 典子	西アフリカ・ベナン	栄養士
5	長崎県国際協力推進員	南 香代子	東アジア・モンゴル	村落開発普及員
6	宮崎県国際協力推進員	崎田 佳予子	東南アジア・インドネシア	栄養士
7	熊本県国際協力推進員	木下 俊和	大洋州・パプアニューギニア	観光業
8	鹿児島県国際協力推進員	大内田 祥子	中央アメリカ・ホンジュラス	栄養士
9	JOCA 九州	福永 善暢	大洋州・パプアニューギニア	村落開発普及員
10	JOCA 九州	田中 雅史	南部アフリカ・ザンビア	村落開発普及員